

統計インフォメーション No.90 (立春にちなんで)

茨城県企画部統計課 石井孝一

気温と景気 なぜ最も寒い時期に「立春」なのか

今年(2010年)2月4日は立春です。

天文学的には、太陽が天球上の黄経315度を通過する瞬間(又は通過する1日)のことで、冬至と春分のほぼ中間にあたる日とされています。

立春にちなんで、気温の変化と景気変動について、面白い関係を見つけましたので御紹介いたします。

「春」は、学校では3月、4月、5月の3か月間をいう、と習ったものです。この3か月は、寒さや暑さもさほど厳しくなく、穏やかな気候でもあります。

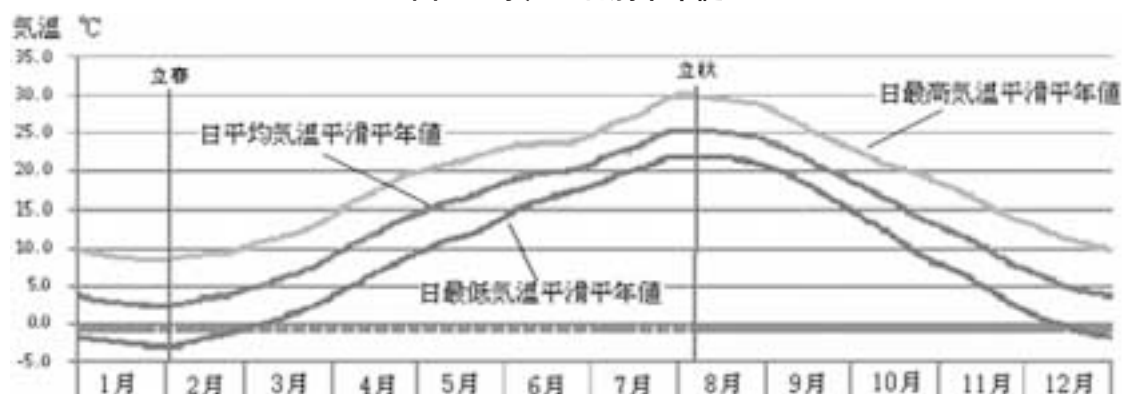
ところが、毎年2月4日頃になると、「今日は暦(こよみ)の上では立春です。」ということばをよく見聞きします。最も寒いこの時期になぜ「春」が使われるのでしょうか。

まずは、データをみてみましょう。

水戸地方気象台ホームページの「水戸の日別平年値」を見ると、1日の最高気温が最も低くなるのは、1月28日から2月1日で8.1℃、また、1日の最低気温が最も低くなるのは1月29日から2月2日で-3.0℃となっています。

そして、注目すべきは、1日の平均気温が2.4℃と、最も低くなる時期です。それは、1月28日から2月3日にかけてです。「立春」である2月4日は、1日の平均気温が2.5℃と、「1年間のうちで最も寒い日の次の日」にあたっていたのです。

図1 水戸の日別平年値



資料：水戸地方気象台「水戸の日別平年値」から作成

「立つ」を辞書で引くと、「立つこと」の他に、「旅立つこと」、「出発」とあります。

1年で最も寒い最後の日が「節分」で、「立春」は、その翌日です。

つまり、「立春」は寒くなっていく日々にも別れを告げ、「春」に向かって旅「立」つ最初の日、と捉えると合点がいきそうです。

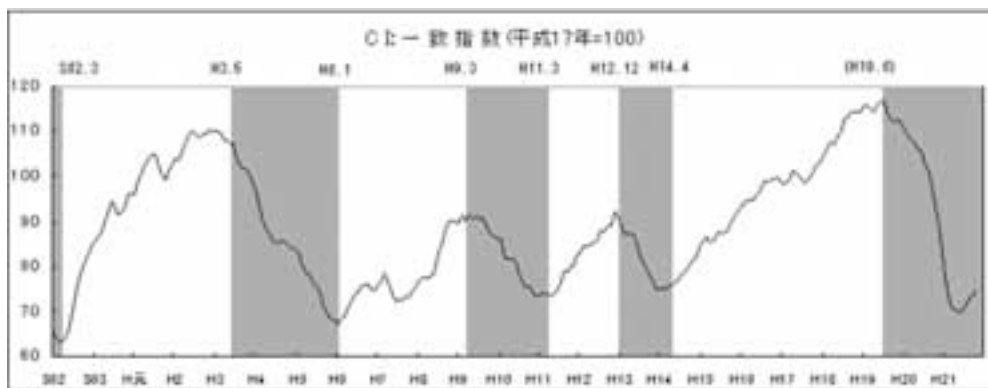
(裏面に続く)

一方、景気はどうでしょうか。

茨城労働局が2010年1月29日に公表した2009年12月の茨城県の有効求人倍率は0.39倍と、雇用情勢は依然として厳しい状況が続いています。特に2008年秋のリーマンショック以降は景気に関し「寒い」記事が目立ちます。

下の図は、茨城県景気動向指数のグラフです。

図2 茨城県景気動向指数（C I一致指数，3か月移動平均）



資料：茨城県統計課「茨城県の景気動向」（注：シャドー部分は景気後退期。）

昭和62年3月、平成6年1月、平成11年3月、平成14年4月は、それぞれ「景気の谷」で、それらの直前の景気が最も下降した時期にあたります。そして、この「景気の谷」を境に、景気の「回復」局面に入ります。

景気の水準としては、まだまだ低いにもかかわらず、「景気の谷」の次の月からは、景気が「回復」している、というような表現を用います。

逆に、茨城県の景気がピークを付けた平成19年6月を「景気の山」として、茨城県統計課が公表しています。「景気の山」の直後は、まだまだ景気の水準は良かったにもかかわらず、平成19年7月以降「景気の後退局面に入った」としているのです。

気温の方はいかがでしょうか。

暑さのピークである8月6日の次の日、8月7日は「立秋」です。「立秋」の時は暑い盛りですが、「立秋」以降は気温が下がっていきます。

どうやら、気温も景気も、上や下に向かい始める瞬間を捉えて、表現する傾向があるようです。その点、どちらも「気」が合ってますね。

ただし、気温は、毎年ほぼ規則正しく変化し、予測が可能であるのに対し、景気は、後退期や回復期の期間や水準が不規則で、予測も難しいものです。予測はおろか、景気の「山」や「谷」が通り過ぎてもお気づきかずにいることさえあります。その証拠に、景気の転換点である景気の「山」や「谷」がいつであったのかの判定が出されるまでには、1年以上も経ってからがほとんどです。（実は、先の「景気の山」の設定について、国や全都道府県中の先陣を切って、茨城県が公表しましたが、それでも公表は平成20年10月になってからでした。）

さて、現在の景気はどちらに向かっているのでしょうか。

上のグラフをみると、右端部分が釣り針のように見えます。既に景気は谷から脱し、上に向かっている、つまり、景気回復局面にある、と信じたいものです。